
ズッコケ大冒険

中村 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ズッコケ大冒険

【Nコード】

N6182F

【作者名】

中村 翔

【あらすじ】

関ジャニ∞「ズッコケお宝パニック」のパロディ小説です。ファンタジー思考で完全ギャグ。シリアスもほんのちょびつとだけ。

【とりあえず、設定紹介】（前書き）

キャラクター（メンバー）のイメージが合わない方は読まないで下さい。

とりあえず『設定』を読んで考えてみて下さい。

【とりあえず、設定紹介】

初めまして、こんにちは。
作者の翔と申し上げます。

とりあえず、キャラクターの設定や世界観の設定を載せます。
読まなくても、今後、小説の中で出て来る事ですが、
読んでいると、またわかりやすいかもしれません。

＝ キャラクター設定 ＝

■ ただよし

さすらいの孤独な勇者。
食欲と睡眠欲が旺盛で、服装以外勇者らしくない。
後、ご飯が絡まなかったらやる気があんまり見受けられない。
主人公らしくない、本編の主人公。

■ スミス

恥ずかしがり屋で天の邪鬼な賢者。
知識をひけらかす様な所は無いが、要所要所でよく噛む。

■ 雷鳥2号

→はふざけて言った名前で本名はちゃんとある。

魔導師であり魔法使い。災難などを自然に呼び起こす。

王様と大臣の幼馴染で、王宮仕えをしている。

■グルス

町で見かけるお腹を壊しやすい遊び人。

変な一発ギャグなどを無償で見せてくれるハートウオーマー若干ウザい。

■トニー

狩人。狩人のくせに動物が周りに集まってきちゃって狩りが出来ない。

優しくて、ツツコミを目指しているくせにいつも弄られる。

愛すべきキャラクターなのかもしれない。

■ゴンザレス

カンパチ王国の大臣。

かなりの倹約家で、節約家。金銭管理はすべてこの人。

また、かなりのツツコミ気質で、臆することなく王様にも突っ込む。王様とは、ツーカーの仲の様だ。

■王様

最近太っている事を気にしているくせに食べる事を止められない王様。

リーダーシップをとる様な人物では無く、裏ではゴンザレスが全てし切っている様な状態。

心優しく民にも愛されているが、図に乗ると煙たがられ、スベると笑われる。

→の様なふざけた皆さんで進めて行きます。

駄目だと言う方は読まないで下さい。

完璧ギャグです。シリアスも少々あると思いますが、比率で8：2です。

＝ その他の設定 ＝

特にこれと言っては無いのですが、通貨の単位が「エイト」です（笑）。
1円＝1エイトと言った感じですね。

単価を別にすると、私が混乱するので（バカ

では、楽しんで頂ければ幸いです。

とんでもなく長編なので、本当、すみません。

1週間に3回程の更新頻度でやればなと思っています。

プロローグ1…はじまりのはじまりのはじまり（前書き）

この小説は関ジャニ[∞]「ズッコケお宝パニック」のパロディ小説です。

苦手な方は読まれない様にして下さい。

プロローグ1：はじまりのはじまり

「報奨金…良い金額のヤツ無いですか？」

冒険者ギルドのカウンターで受付のお姉さんにたずねると、お姉さんはニツコリ微笑み「少々お待ち下さい」と奥へ下がって行った。

（早よしてくれや…）

そう思いながら男はギルド内を見渡した。

ギルド内には、様々な人物達が思い思いに過ごし、冒険に誘われるのを待っている。

ヤクザやろと思わずにはいられない風体の男。

それ、コスプレか？と聞きたくなる少女。

それでよう冒険しようと思おとるな、と言いたくなる様なインテリ眼鏡。

そして、あからさまな勇者。あからさまな魔術師。あからさまな賢者。

こう見ると、色んなヤツがおるなと、男は思う。

「お客様、メンバーの人数は何名ですか？」

奥から戻って来たお姉さんが訊ねて来る。

「一人です」

「……………はい？」

「…一人です」

「え、あ……………お一人様でしたか！！！」

「……………はい」

「あ、すみません、もう少しお待ち下さい！」

持って来た依頼書に一人で出来る様な物が無かったのか、お姉さんは慌ただしくまた奥に引っ込んで行った。

人数くらい最初に聞いとけやと思ったけれど、まあ、確かに一人で冒険をしようなんて思うヤツ、あんまおらんわな……。

現在の世の中で、定職に就くヤツは稀だ。

ほとんどの者が、冒険をして、その報酬で生計を立てている。

報酬は安いが、簡単な依頼を片付ければ、余裕で2・3日は過ごせるので、そう言うその日暮らしな輩が増えたのだ。

そして、今その冒険ブームはやたらと流行していた。

豆腐屋の主人が、豆腐屋の売り上げだけでは家庭を賄えないと、モンスター退治の依頼を請け負ったりする世の中なのだ。

そう言う者達は、ほとんどこう言った冒険者ギルドで仲間を集めて依頼消化の為の冒険に出かけて行く。

ギルドは登録制で、会員に入っていると依頼の紹介料も何パーセントかは安くなるらしい。

だが、もちろん会員登録をしていなくても、依頼は紹介してくれる男の様に、ギルドにいきなり来て、カウンターで「良い依頼は無いか？」と尋ねるそんな輩もこのご時世、少なくない。

会員登録していない者としている者で何が一番違うかと言えば…依頼の危険度と紹介料の高さだろう。

「お待たせ致しました…。現在お一人様での依頼は3つ程御座います」

「それん中で一番報酬高いのってどれですか？」

独特のイントネーションで男はお姉さんに尋ねる。

「そうですね……この街から南に向かった所に、ニースと言う小さな村があるんですけど、そこに最近女の子を狙った通り魔が出現すると言う話なんです。その通り魔退治の依頼ですね」

「……いくらなんです？」

「……5000エイトです。」

「……もうワンランク下がったらどんな依頼ですか？」

「えーっと……あ！これお勧めですよ！もし良い仕事したら、取り入ってもらえるかも……」

「…ええから、内容聞かせたって下さい」

「あ、はい……少し遠いんですけど……とある王国が二ースの村を通り越えたずとずと奥にあるんです。その……剣術指南です」

男は飛び付いた。

「それがええ！……！」

「でも、報酬が大分下がりますよ？1200エイトです。」

「……王国のくせにケチやなあ……」

「あ、でも、これ1回の指南で1200なので、何個も数をこなしたら、それなりの報酬がもらえるんじゃないでしょうか？」

「なあ……それって、王国のヤツがやる事やないん？普通そんな冒険者に依頼する事ちゃうやろ。」

「……この大臣さんが、すぐお金にうるさい方らしくて……正社員を雇って定額の給金を支払うよりも、冒険者に依頼して来てもらって、見合った給料払う方がマシだって言うスタンスの人らしいです……」

「…へえ……それ……買ってもええですか？」

「はい！是非！！お客様こちらの会員様ですか？」

「いや、ちやいます」

「では、こちらの依頼の紹介料、前払いで650エイト頂きます」

（高あー……）

ここでもし会員だった場合、650が250に割引されるのだ。だから、会員登録する者は多い。

だが、会員登録する者は、そこに根付かなければ意味が無い（何せ、年会費を払わなければならぬからだ）。

本当の冒険者は、その点不利な部分が多いのだ。

「なあ、お姉さん……ここらで安くてがつつり食べられる食堂あります？」

「……そうですね……ここを出られて右手側のお店を2軒程行かれた所に、とても美味しいお肉屋さんがありますよ」

「はあ……どうもありがとうございます……」

お姉さんはチラッと男を見た。

ちよつとだけ頬を赤くしてから「お名前は？」と聞く。

「ただよし」

男は無意識に流し目を寄越し、お姉さんの顔を更に赤くさせた。

ただ、先程から発される男の声音は、フワフワと柔らかく、勇者である事を自ら否定している様な、そんな穏やかさを身に纏わせていた。

「では、登録に少々お時間頂きますので、待合室の方でお待ち下さいませ」

ただよしは、マガジンラックから雑誌を取り出し、近くの人が少ないソファにドツカと腰かけた。

（あー…眠いわー…………昨日も一昨日も野宿野宿…………フカフカのベッドが恋しいわー）

あくびをしてから、雑誌に目を落とした。

＝ プロローグ１ 終了 ＝

プロローグ1：はじめのはじまりのはじまり（後書き）

始まりました、ズッコケお宝パニック長編パロ。

「ズッコケ大冒険」（タイトルセンスねえな

ギルドの成り立ちとか、色々これから紹介すべき事が増えそうですがとりあえずお金の通貨とかそんなの知って頂いてれば読めるものになっています。

世界観の設定などうやむやになっている部分が多いのですが、そう言う世界だと言う感じで……って、おい。

支離滅裂な感じですが、これからドンドン続きます。

よろしければ、評価の程、よろしくお願い致します。

ブローグ2…はじまりのはじまり (1) (前書き)

分かりやすい風景描写の仕方がイマイチ分かりません…

ブローグ2：はじまりのはじまり (1)

街で評判を聞けば、なかなかの高評価を得られる。
短所と長所を聞いてみると

・長所

住んでて面白い

国民の事を第一に考えてくれる

祭りとかそう言う行事が頻繁で飽きない

活気がある

お笑いを愛している

・短所

うるさい

他の国に比べるとアクが強い気がする

地域意識が根強く、他をあまり受け入れない

面白く無いと認めてくれない

傍から見ていてちょっと本人らもきつそうに思う

国王自らテレビに出しゃばり過ぎだ

諸々の事柄が、挙げられた。

（国民からしたら抗議したくなる様な誤った情報も含まれているが）
長所と短所を同時に聞いて、少しでも短所が多めに返って来る。

そんな王国 「カンパチ」。

お笑いが愛され、それを国も皆に見て欲しいと、逸早く最新機器の
テレビを導入した、前衛的な文化国家だ。
しかし、「自分らが良ければ」と言う保守的な一面も持ち合わせ、
国民達は皆、そのアクの強さで他の国の人々から一目置かれている。

国の要、東の大門をくぐると、そこは商人達の街が延々と続く。
くぐつてすぐに「お兄さん！これ！この銃剣なんて今人気だよ！」
なんて声が掛けられ、なかなか前に進めない。
商い精神が非常に高い活気に溢れた街だ。

その商人街を突き進んでちょうど王国の中央、噴水のある広場では、
仮設テントや特設会場が設けられ、毎日何かしらのイベントが行わ
れており、漫才やら漫談、落語に笑点等々様々な催し物が披露され
ている。

この広場沿いには、私設の劇団を持つ者が共同で運営する劇場「グ
ランド影津」がある。

ここでは、毎日違う劇団が舞台一杯を動き回り国民の笑いを引き出している。

他に、映画館、大きな武器屋・防具屋・道具屋、ミ。ユランに掲載されそうなレストラン、ホテル等がひしめく、カンパチ王国の主要な場所である。

その広場を通り過ぎると、続いては緑の広がる街道が目の前に現れ、そこを抜けると貴族街だ。

主に王宮に勤める者や、それらに携わる者達が住む、少々閑散とした場所だ。

商人街に比べ、あまりにも静かで、先の緑の街道からこっち、まるで別世界の様な印象を受ける。

ただ、道で会えば「あんさん、見らしまへんお顔やなー」なんて声を掛けられたりして、「今度新しく王宮に勤める事になりました……」なんて言おうものなら「あら！私も王宮で何たらうちゅー仕事に就いとりましてなあ！これからはお仲間さんやね！」なんてフレンドリーに声を掛けて来てくれて、他の国の貴族とは少々違う優しい一面がある。

それが、どこまで本心かって言うのは別として。

貴族街を抜けると、再び緑溢れる光景が目の前に広がり、一見森かと思う、そこを通り抜けると、階段が延々と続く光景を目の当たりにしなければならない。

果たして何段になるのか不明な程に、階段ばかりが目の前に広がる。階段の周りは何も無く、石垣がうず高く張り巡らされている。

その為、王宮に向かうには、この階段のみが交通手段となってしまう

うわけだ。

これでは、敵国の者が来ても、この階段を上っている途中で戦意なんて殺がれてしまっだろう。まあ、よく考えられたものだ。

しかし、王宮勤めの臣下からは、非常に不満を持たれているらしいが、これはもう仕方無い。

ご先祖様に文句を言うほか無いのだから。

この階段を上り詰めた後に現れる、その建物。

目の前には門の一部しか見当たらないその何もかもが大きな建物。

これがこの国の中枢であり要の

エイト城

通貨と同じ名称だが、ここが発祥だとか、そう言うルーツ的なものは無い。

とりあえず、デカイ。

門も人の手ではまず開けられない。

からくりで開く仕組みになっているのである。

そう言えば、カンパチは、からくり職人が多いのでも有名だ。

これは参考までに頭の片隅に置いておいてもらえると有り難い。

門をくぐり抜けた、そこには、豊かな緑がひしめく広大な森かと思
まごうばかりの庭が広がり、またまた小さな少数の階段群を上って
行く事で、やっと王宮本体に辿り着く事が出来る。

そしてまた、この王宮の中の人間の役職等が何十もあり、これはも
う説明が長引くので端折る事にしよう。　＜面倒なだけとちゃうん
かい　by 大臣

では、ここからは、王宮の人物にスポットを当てて、読んで頂く事
になる。

王国の説明を長い事喋りまくってすまなかった。　＜あんだナレ
ー　by 大臣

プロローグ2：はじまりのはじまり (1) (後書き)

とりあえず、街の紹介から。

次で、人物にスポットをあててやっていきます。

プロローグ2…はじまりのはじまり (2) (前書き)

関西弁がおかしいのは許して下さい…!!

プロローグ2：はじまりのはじまり（2）

派手な服装の男が絢爛豪華に飾り付けられた廊下をキビキビと歩いて行く。

傍らに書類を抱え込み、もう一方には丸められた資料らしき物を一杯に入れた入れ物を手に提げている。

長い足を一杯一杯に伸ばしながら、急ぐ男に、後ろから別の男が声を掛けた。

「おい、ゴンザレス」

ゴンザレスと呼ばれた男は、クルツと声を掛けた男に向き直る。

そして、気軽に馴れ馴れしく「何すか、王様」なんて発言をするのであった。

「何すかって何やねん！！！！俺、王様やで！？」

バタバタと手足を思いつ切り振って抗議する、その男に呆れながらゴンザレスは溜め息を吐く。

「はいは、何ですかね、王様」

「……………風の噂で聞いたんやけど……………お前……………何や俺の知らん所で勝手してくれよらしいやないか」

「……………何が？」

「しらばつくれるなあああっ!!」

そして、やはりバタバタと手足を泳がせる。

その姿は、まるで駄々っ子だ。

（ちなみに王様は今年で27歳になる成人男子だ）

「お前え…色んな街のギルドに、ここの依頼出しとるって話やないかい!!」

「あーその話ですか。出してますよ？」

「何そんな『当たり前じゃん』みたいな言い方してくれとんじゃ、むかつくわ!!」

「そんな、むかつかんといて下さいよ。王国内の人員削減して、お金を出来るだけ作れるようにしようって、この前朝の会議で言ったばかりでしょう？また、聞いとらんかったんかい」

「うつさい!!何で他から手配すんねん」

「はい？」

「何や、勝手知ったる人物とかおるやろーが!!…何で他の場所から手配すんねん!!」

ゴンザレスは、資料を入れた入れ物をブラブラと動かしながら（まあ、始まった）

と、思った。

「同じ様な駄々をね、バルの奴にも言われたんすよ」

「あー…やるなあ…」

「でも、変えしませんからね？」

「お前は何でそないに頑固やねん！！！」

もう荷物を持つ腕がいい加減しんどくなってくる。

「もう、行きますからね。大体、あんたまた肉付いたやろ！！！！ダイエツトせえよ！！？」

「何やその口の利き方はあああつ！！！！」

「あ、後、王様。ギルドから色んな奴が集まってくると思いますけど、あんた仮にも王様なんやで。その人見知り、直しときや」

ブローグ2：はじまりのはじまり (2) (後書き)

王様とゴンザレスの会話でした。

何か絶対、王様は不安がってそうだって^^

コメントや評価等、もしよろしければお願い致します。

と言っても、パロだから、あんまり……って感じですねu

ブローグ2：はじまりのはじまり (3) (前書き)

間違った関西方面の言葉には
目を瞑っていたけるとありがたいです。
本当に申し訳無い!!

プロローグ2：はじまりのはじまり (3)

あまりにも、憂鬱そうな顔をして王様が歩いている為に、王宮内の人々は、思わず「お身体の具合がよろしくないのですか!？」なんて声を掛けて来るが、今、王様はその声掛けですら煩わしくて仕方なかった。

「あのゴリラ……………絶対にいつか目ん玉食らわしたるからな…クソ…」

カンパチの王様は、それはそれは面白い人物で、国民にもそれはそれは人気のある、この大陸内で一番国民から支持を得ている王様だろう。

それもそのはず王様は、自分が楽しければ手段を選ばない人で、何かあれば国营放送・民間放送関係無くテレビに出しゃばって、寒い事を言って帰って行ったり、自ら身切れでテレビの端っこに出演していたり、テレビに関して神出鬼没だからである。

国民達は、そんな王様をブラウン管で見つけたら「今日はあの番組のあそこに居た!」なんて、まるでウォーリーを探せ!みたいなノリでテレビを見ている。

まあ、確かにこの王様。

国民へのサービス精神は旺盛過ぎる程に旺盛で、そんな王様の右腕である大臣は、常に頭を抱えなければならぬわけだが。

だが、この王様。

極端な人見知りでも有名であつた。

テレビに映る際は、テンションが高めなのか、ノリノリなので面白い事もスパーンと言えたりするのだが、街でたまたま見掛けたりして「王様！握手して下さい！！」なんて駆け寄ったら、顔をチラチラ隠しながら照れてはにかみつっ、おずおずと手を差し出して来たりする。

しかも、面白い言葉や行動が全く出て来ない。

そのギャップが面白いのかもしれないが。

とりあえず、王様は人見知りだった。

（あー…これでまた俺の居場所はこの王宮内から無くなるんや…もうゴンザレスのアホが実験握つとるようなもんやないかい……………あ
あ…憂鬱や…）

そう思いながら、王宮内に潜むもう一人のぶら下がる程度の右腕、バルの事を思い出した。

（あいつ……あいつは大丈夫なんやろか……俺よりも、あいつが心配やわ）

王様は、確かにワガママかもしれないが、そのワガママに皆が付き合ってくれるのは、陰でこの様な優しさを持っているからだろう。優しさが無いと人にサービスは出来ない。

これが、王様の王様たる所以なのかもしれない。

ブログ2：はじまりのはじまり (3) (後書き)

いかがでしたでしょうか？

王様の人となりがちよっとは分かった気がします。

気持ちは大きいくせに、チキンハートという

ちよっとした矛盾キャラが、動かすのに難しいです。

これ、彼らの名前を借りた、

もうオリジナルな気がしてしょうがないです。

しかし、これからも楽しんで頂ければ幸いです。

ブローグ2：はじめのはじまり (4) (前書き)

相変わらず、いや、いつにも増して
エセ関西弁が炸裂しています。
キャラも崩壊気味。
苦手な方は回れ右でお願いします。

プロローグ2：はじまりのはじまり（4）

暗い部屋で一人、黒ずくめの衣装を着た男が憂いを帯びた表情で立ち尽くしていた。

あまりにも黒ずくめなので、ほとんど部屋の暗さと同化してしまっている。

男は先程から一点を集中して見つめ、精神統一をするかの様にスーハースーハーと深呼吸を繰り返していた。

そして、深呼吸をし終わると、ブツブツと何かを小さな声で呟いた。男は、杖を握り締め、一回だけ、床をコンとその杖で叩いた。

部屋が暗いのでよく分からないが、床には、白い文字でごくごく小規模な魔法陣が描かれていた。

「例えば……突然花瓶が割れたり……」

そう男が呟くと、別の部屋からだろうか、パリーンと大きな音が鳴った。

同時に聞こえる「何やねん！いきなりい！！」と言う大臣、ゴンザレスの驚いた声。

そう、ここは、ゴンザレスの居る仕事部屋の隣、物置になっている

空き部屋だった。

クツクツと声を殺して嬉しそうに笑う黒ずくめの男。
そして、再び呟きながら、杖で床をコンと鳴らす。

「いきなり突風が吹いて来て、書類が部屋中に散らばるねん」

と言うと、いきなり隣から「うおおおい！！！！ちよ、いきなり何
iiiiiiii!？」と盛大な大声が響き渡る。
黒ずくめの男は、またクツクツと陰湿な笑いを起こしながら、う
っすらと笑みを顔に刻み込んでいる。

「こんなもんじゃ済まんぞ……」

そう言いながら、もう一度コンと床を鳴らそうとしたその時だった。

突然バアアアンと部屋の扉が開いたのだ。

黒ずくめの男は、いきなりの事で目を真ん丸に見開いて、固まっている。

その男の前には…かぼちゃパンツかと思わしきズボンに白タイツと言いついかにもな格好をした大臣ゴンザレス。

しかし、その顔には大魔神かと問いたくなる程の怒気を漂わせていた。

カツカツと無言で部屋に入って来る。

そしていきなり、魔法陣の白を足で荒らし始めたのだ。

「っだあああちよ待てえやああ！！！！これ、これ、編み出すのに一週間要したんやぞ！！」

「知るかぁ！……俺の仕事の邪魔する為に要した陣なんて……こ
うや！……うや！……！」

「こうやこうや」と言いながら、ゴンザレスは足で白を消して行く。

「ちょ、悪かったって……！な？ゴンザレス、やから、止めて？」

「うっさいねん、お前、人が一生懸命仕事しとるっちゅーのに、こ
んな遊びで邪魔したってから……」

ゴンザレスから、先程の怒気は消えたが顔は笑っていない。

「やって……」

「もー……。王様と言い、バルと言い……頼むからその人見知り、
直したってくれや……」

「やってえ……！お前がいけんのやないかあい……！勝手によそか
ら人雇うって……！相談してくれてもええんちゃうかつたんか……！」

「……したやん」

「……へ？」

「したやん、俺」

「……したか？」

先程までの、優勢が、たちまち逆転の形をとった。

「会議に案出す前に、お前にも言ったやん…『お前人見知りやから
良いつて言わんやろうけどー』とか言つて…」

「……………え、マジか？」

「マジやよつて…。こんなんで嘔吐くかい」

「……………聞いてへんぞ？」

「言つたわ」

ひたすら流れる無言の時間。

バルと呼ばれた男は、おずおずとゴンザレスの瞳を盗み見る。

その目は、真っ直ぐにバルの瞳を捉えていて、思わずバルは目を逸らした。

「ほ…ほんまに言つたか…………？」

「……………やから、嘔吐くかい。こんな事で。何日前やつたかなー……
廊下で喋ったやろが、夕食行く前の。」

「……………え、ほんまか？」

「何回言わせられんねん！！言つたわ！！！！！」

「ほんまかああああい！！！！！！もおおおおおつつ嫌やー
！！！！！！」

突然叫び出したバルに、思わずゴンザレスも驚いた。

「なあなあ、今からでもその案件って下ろされへんの?」

涙目で訴え掛けて来る。

「もう、無理や。各地のギルドに依頼出してもーたもん」

「もおおおっ!」

「大丈夫やよつて。ちゃんと面接なんかするから、お前にも合う様なヤツ選んだるから」

「…ほんまか?」

「おー、約束や約束!ー俺ら友達やないか!ー!」

そうやって、八重歯をキラリと見せながら大きな口を開けて笑うゴンザレスを見て、バルもやっと落ち着いた。

（はぁ…あかんなー……………ゴンザレスのアホたれ……………何で許してし

まっつんやろなー…まあ、俺が聞いとらんかったのがあかんのやけど…)

「ゴンザレスのアホ」

そう呟いて、バルは部屋を去って行った。

「何やのん、あいつ……て、あ！…そうや、謝らせよう思てこつち来たんやつたああ！…もー！…何日か前から気付いてんけど、全然捕まえられなかったからなあ…これであいつも頭冷やすやろ！…」

そう言いながら、ゴンザレスは仕事部屋に戻って行った。

T o B e C o n t i n u e d . . .

ブローグ2：はじまりのはじまり (4) (後書き)

ゴンザレスとバル。

何か、書きやすかったです！。

錯覚かもしれませんが（笑

感想等お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6182f/>

ズッコケ大冒険

2010年10月11日05時49分発行